外国人として生きる

インドネシアと日本をつなぐ人

浜元 聡子（はまもと さとこ）
京都大学東南アジア研究所研究員

日本人〈研究者〉の癒しの存在

おかっぱに切りそろえた黒髪をなびかせて、アグネスさんはいつも颯爽と、にこやかに登場する。ドロテア・アグネス・ランピセラさんは、インドネシア共和国南スラウェシ州マカッサル市から京都へやって来た。二〇〇六年九月から一年間の予定で、京都大学東南アジア研究所に外国人研究員として招聘された。今回の来日は、アグネスさんにとっては二〇年前に続いて、二度目の長期滞在となる。前回は、京都大学農学部の大学院生として五年間を過ごした。夫のルスリさんは、インドネシアで二人の子どもを育てながら、留守を預かった。今回の来日には、オランダの大学を卒業したばかりの長男デニくんと長女のリリィさんも同行している。一一月末には京都で銀婚式を迎えるために、ルスリさんも日本にやって来た。

二〇年ぶりの京都ではあるが、そのあいだアグネスさんは、インドネシアにいながらにして、日本との深いかかわりをもち続けてきた。アグネスさんの出身地、マカッサルは、一八世紀以降、オランダ東インド会社による香料交易の中継港として栄えた。一九四五年にインドネシア共和国が独立を果たし、それから六〇年余り。スラウェシ島と日本の関係は、ブラックタイガー、紅茶、コーヒー豆など、海と山から産出される農水産物の交易によって結ばれてきた。日本政府のODAやJICAによる経済開発や村落開発支援活動もまた、マカッサルの街を拠点として、スラウェシ島の各地で実施されてきた。

一方、一九五六年にマカッサルに設立された国立ハサヌディン大学は、共同調査研究や学術交流などで、日本からの研究者を数多く受け入れてきた。アグネスさんは、同大学農学部の講師として、日本の学術界とも活発にかかわってきた。類いまれなる日本語能力と、ボランティア精神に溢れる穏やかな人柄のアグネスさんは、ジャワ島でもなくバリ島でもない辺境の島におっかなびっくりやって来る日本人にとっては、まさに癒しそのものであった。と同時に、JICAやJOCV関連のプロジェクトでは、もち前の行動力を発揮して、日本語の通訳にとどまらず、住民参加型開発を実践する一員としても、活発な活動を展開してきた。

アグネスさんはルンバガ・プランギというNGOの設立者でもある。貧困村の子どもたちに地元で収穫される大豆から作る豆乳を飲ませて栄養状態を安定させたり、子どもたちが好きなときに本を読めるように村に図書館を建設したり、女性たちによるムスリム・ファッションの衣類縫製プログラムも走らせたり。何か立派でむずかしいことをしてあげるというのではなく、自分も現場で人びととかかわりつつ、楽しむことを大切だと考えている。そんなアグネスさんを慕って、多くの若い人びとが、スラウェシ島で開発学や地域研究の調査をおこなうようになってきた。

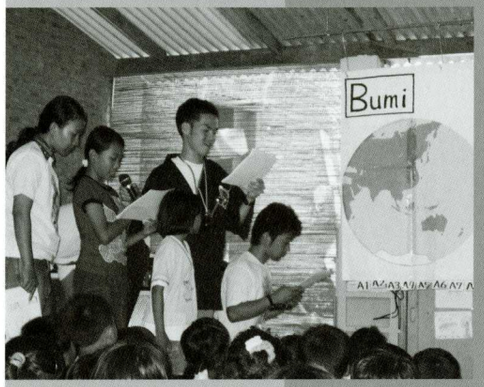
おもしろいが必須条件

初めてアグネスさんに出会ったのは、わたしが大学院修士課程の一回生だった一九九五年八月のこと。当時、インドネシア語も覚束ないどころか、自分が一体何を調査したいのかも、明確に説明することもできなかった。そこで紹介されたのが、アグネスさんだった。大学の先輩だということは聞かされていたとはいえ、アグネスさんは農学部で砂防工学の学位を修めたとのこと。話がまったくかみ合わないのではないかと、今となっては自分の了見の狭さを物語るような不要の心配をしていたのであった。

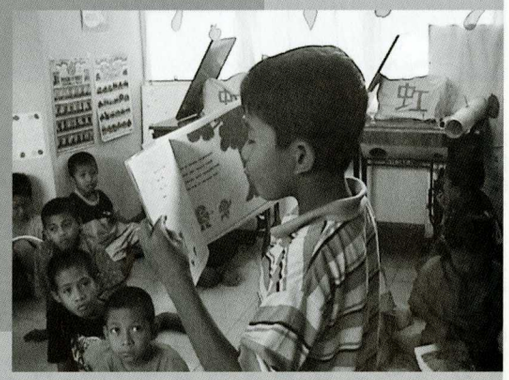
約束の場所にあらわれたアグネスさんは、驚くべき、じつにこなれた日本語を話す人だった。聡明ということばがこれほどふさわしい女性も、なかなかいないだろう。分野の違いを越えて、おもしろいものはおもしろいと評価でき、積極的に自分もかかわっていくフットワークの軽さを目の前で見せてくれる。フィールドワークということばだけはかろうじて知っていた当時のわたしに、どれほどの影響を与えてくれたかは見当もつかない。こんなことを調査したいと思っているとつたないインドネシア語混じりの日本語で話したところ、おもしろい！まずはやってみましょう！と、即座に反応してくれた。アグネスさんと話していると、ひんぱんに飛び出すことばが、この「おもしろい！」であることも、すぐにわかった。あれこれ考える前に、まず「おもしろい！」と、思ってみることが研究者としての必須条件、そう教えられたように思うのである。

二〇〇六年、インドネシアのジャワ島はふたつの大きな自然災害に見舞われた。五月に発生した中部ジャワ地震の被災地で、わたしは京都大学工学部の学生が中心となって主催する「京大防災教育の会（KIDS）」のメンバーと一緒に、子どもたちに防災教育を伝える活動をおこなった。ドラえもんが登場する寸劇を利用して、地震発生のメカニズムを伝え、災害時にパニックにならないような情報をもってもらうことが目的である。学生たちが作った日本語の台本は、大学院生やアグネスさんの協力があって、無事に全編インドネシア語に翻訳された。出発前には、アグネスさんの指導の下、インドネシア語の特訓がおこなわれた。そのおかげもあり、防災教育活動は成功を収めた。アグネスさんは当然、この活動を「おもしろい！」と思ったわけである。そして、その薫陶を受けていたわたしもまた、スラウェシ島からジャワ島に進出することに決めたのだった。

京都大学東南アジア研究所での
インドネシア語特別講座の様子



アグネスさんが翻訳協力をした
インドネシアでの防災教育実演



アグネスさんが開設した
子どものための図書館。
南スラウェシ州タナバンカ村

20年ぶりの京都大学での再会。
右から2人目がアグネスさん

日本人の側の意識変化

さて現在、京都ではアグネスさんによる特別インドネシア語講座が開かれている。KIDSのメンバーの他、京大の学生や職員もまた、この非公式のクラスを受講している。アグネスさんによれば、二〇年前に比べると、京都の町ははるかにインターナショナルになったとのこと。以前は、アグネスさんと英語で話そうとする人はたくさんいたが、インドネシア語で話しかけられることはほとんどなかったという。それが今は、外国人だからと特別扱いするのではなく、まず日本語で話しかけられるようになったことに驚いたという。外国人と日本人という区別が特別なものではなくなったのではないかと、アグネスさんは感じている。二〇年ぶりの京都でえた日本人との新しいつきあい方の感覚を胸にして、これからの一年を、アグネスさんはどんなふうに暮らしていくのだろうか。今回の滞在でえた新しい経験を、しっかりとインドネシアに持って帰ることが自分の役目だと、アグネスさんは考えている。インドネシア人や日本人というくくりを越えて、どこにいてもまずは「おもしろい！」と思い、軽やかにステップを踏んでいくであろう。そういう姿を調査観察してみたい。